

東京大学大学院医学系研究科 国際保健政策学 気候変動時代の国際保健学



教授

橋爪 真弘 (はしづめ まさひろ)

グローバルヘルス、プラネタリーヘルス、環境疫学、気候変動の健康影響評価を専門とする。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第6次評価報告書主執筆者、WHO技術諮問委員会委員、中央環境審議会気候変動影響評価等小委員会委員、環境省気候変動の影響に関する健康分野WG座長などを歴任。

「気候変動と健康」

近年、気候変動が人々の健康やウェルビーイングに及ぼす影響の広がりや深刻さが、ますます顕在化しています。日本では2023年以降、3年連続で記録的な猛暑に見舞われました。2024年には全国で約9万7千人が熱中症により救急搬送され、これは2008年の統計開始以来、最多の人数となりました。こうした極端な高温に加え、豪雨、干ばつ、森林火災などの異常気象は、直接的な健康被害のみならず、感染症の拡大、栄養不良、精神的ストレス、さらには保健医療システムの機能への深刻な影響を引き起こしています。特に高齢者や子ども、基礎疾患をもつ人々、社会的に脆弱な立場にある方々は、こうした影響を受けやすいことが知られています。

「学際的・国際的な学び」

東京大学大学院医学系研究科・国際保健政策学教室では、こうした複雑で多面的な環境変化による健康影響を科学的に解明し、実効性のある政策的対応につなげるための研究と教育に取り組んでいます。疫学や統計解析を中心とした分析手法に加え、気象観測データや衛星データを活用した環境情報の統合分析や、保健医療制度や政策との接続を意識した学際的なアプローチを重視しています。近年では、熱中症や感染症に関するリスク評価にとどまらず、気候変動と高齢化の複合的な影響評価、災害時の脆弱性評価、公衆衛生介入の効果分析など、国内外の研究機関との共同研究も積極的に進めています。

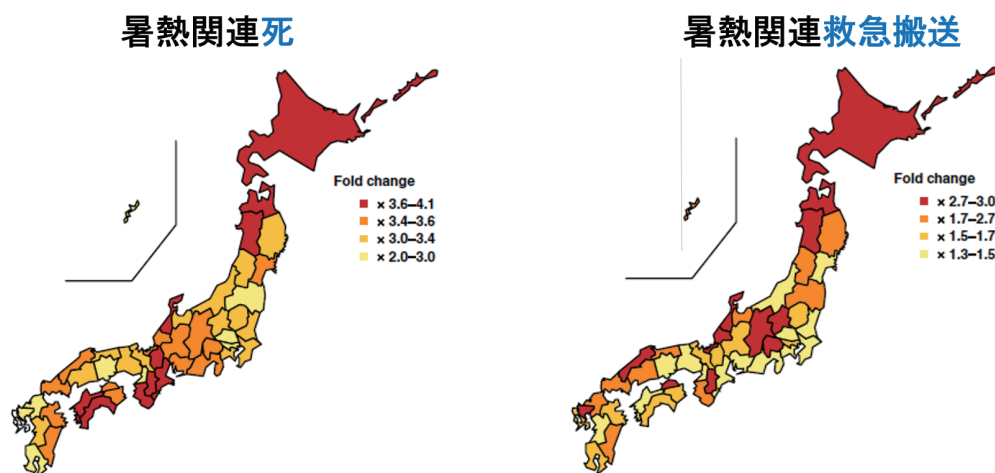
当教室には、医学、疫学、統計学、環境科学、工学、政策科学など、多様な専門性をもつ教員・研究者が所属していま

す。学生はこうした環境のなかで、複雑な健康課題に学際的な視点から取り組む力を育んでいます。例えば、ある博士課程の院生は、多分野の研究者が集まる研究班に参加して人口動態統計や気象データを解析し、将来の暑熱関連死や救急搬送を予測しました。その結果、気温が産業革命前と比べて約2℃上昇すると、今世紀末には全都道府県で人口当たりの暑熱関連死が現在の2倍以上になることが明らかになりました(図)。

講義やセミナーは英語で実施しており、国内外の事例を通じてデータ分析や論文執筆、政策提言の方法を実践的に学ぶ機会が豊富にあります。大学院生(修士・博士)の約3分の2が海外からの留学生であり、学生同士の交流を通じて、多様な文化・価値観に触れる国際的な学びの場となっているのも特徴です。

将来予測 (2090-2099年、人口当たり)

ベースライン 2010-2019年 (SSP2-4.5)



Yuan et al., Lancet Regional Health -Western Pacific 2024;52: 101214

図：将来の気温上昇に伴う暑熱関連死および暑熱関連救急搬送リスクの予測



①修生の送別会を兼ねたお花見

②③国際保健政策学教室主催のアジア・サマースクール（2025年7月 東大・本郷キャンパス）

「専門人材の育成」

本教室では、将来、国内外で活躍する保健医療の専門職や研究者、政策立案者の育成を目指しています。修生は、国際機関、大学、公的機関、NGO、シンクタンクなど幅広い分野で活躍しています。特に、将来的に国際機関などで国際保健分野に携わりたいと考えている方には、国連職員としての道だけでなく、技術諮問委員会等でガイドライン作成など「規範づくり」に携わり、グローバルな意思決定に貢献する専門家としての道もあることを知っていただきたいと思います。当教室では、そうした役割を担う専門人材の育成にも力を入れています。

「プラネタリーヘルス」

近年注目されている「プラネタリーヘルス（Planetary Health）」は、地球環境と人間の健康が相互に依存するという視点に立ち、将来世代も含めた持続可能な健康のあり方を探る新たな考え方です。地球環境の健全性が損なわれれば人間の健康も成り立たないという認識のもと、医療や保健の分野もこの課題に積極的に関わることが求められています。当教室では、文化的・専門的に多様な人々と協働し、科学と政策の橋渡しを担う力を育むことを通じて、持続可能な未来の健康社会構築に貢献できる人材の輩出を目指しています。



環境疫学データ解析・グループワーク

教室HP：<https://www.ghp.m.u-tokyo.ac.jp/>